

お豊。おやさう。

岸。だからさ……(側へよる)

お豊。いやてば。(立って上手へ行く)

岸。そんなにしなくなつていゝぢやねえか！ ……俺話があるんだよ。だからさ、ちゃんと座つて聞いてくんよ。な、な。

お豊。話があるなら、其處で云つたらいゝぢやないの。

岸。だつてさ……(追つて行く)

お豊。(するとわけて) 今に皆んな上つて来てよ。

岸。情知らず！

お豊。さうさ、私情知らずさ。

岸。薄情女！

お豊。さうさ、薄情女さ。

岸猶も追つ、行かうとする時、里見とおあさが出て来る。四人しらけて立つ。とピーツといふあ

しの音と共に、吹雪バラバラと正面窓の障子を打つ。

里見。あゝ吹雪が来た！

おあさ。早く戸を閉めなくちや！

急いで行つて窓の障子を開ける、と吹雪バラ／＼と飛び込む——幕

第二幕 吹雪の宵

前幕から四五時間後の事。

お客の去つた跡らしく二つの部屋とも、食べちらかした容器がごろ／＼してゐる。此方の部屋の真中で、お豊、おあさ、お鶴の三人が火鉢を圍んで話してゐる。

戸外では暴風雪の響がすさまじく唸る。

おあさ。まア初めて聞いた。それぢやなんですか、こゝの姉さんの旦那は、昔お豊さんのお客だつたのだつて……

お豊。濱町にゐた時分のお客だつたんさ。

おあさ。ほんとに呆れちまうね、鶴ちゃん。

お鶴。さうだね。

お豊。姉さん今でこそ主人顔をして威張つてゐるが、其時分はやはり私と一緒に商賣をしてゐたのよ。

おあさ。そのことは一度、姉さんから聞いたことがあるわ。それで其の時、今のあの旦那を奪つちやつたの？

お豊。私實はね、あの旦那貧乏くさいので、冷たくあしらつてやつたのさ。それで始終いやなごたごたがあつてね、其のたんびに姉さんが中へはいつて、口をきいてくれてつたのよ。

お鶴。それぢや、ねえさんとお豊さんとは、仲好しだつたのね？

お豊。あゝさうよ。出るお座敷も大抵同じお座敷だし、歸つて寝る時は何時も一緒に寝たもんさ。そして仕舞には姉妹の約束までしたもんさ。

お鶴。まア、それほどにね！

おあさ。それであの旦那のこと、どうなつたの？

お豊。旦那はね、私がいやがらせをすればする程しつこく来るのさ。私も時には氣の毒だなアとは思つたが、つひ／＼意地になつていぢめたもんさ。其の時姉さんが云ふには「お前そんなにあの旦那がいやなのなら、私に譲つてくれない。私ほんとにあの旦那が氣の毒で堪まらないから」だつた。

お鶴。まア！

お豊。私其の時心の中で、ハツと思つたのよ、けど今更ら譲れないとも、云へないぢやないの。「あゝどうかさうして下さい。私それで厄介拂ひをしたやうな氣がするから」と云つちまつたのさ。

おあさ。ほんとを云へば、お豊さん未練があつたのね？

お豊。さうさね、それは妙なものさね。

おあさ。それで取られちまつたと云ふの？

お豊。さうさ。それから、なんぼなんでも姉さんと私、どうもへんでせう。次第々々に心ばなれがして來たんさ。

おあさ。それやさうだらうね。

お豊。その間戦争が起つてね、あの旦那の仕事がうまく當たつて、急に成金になつたのよ。そこで姉さん早速一軒獨立した店を出して貰ふといふ、とん／＼拍子の大出世さ。それにひきかへ此の私はね、次第にいゝ客はなくなるし借金はふえるし、どうにもかうにもならなくなつたところへそれ例のお上がまがきびしくなつて來たらう。毎晩のやうにお手入れがあつて、濱町は火の消えたやうな仕末……

おあさ。あれはひどかつたわね。私はあの時千束町にゐたんですが、主人おやがにと一緒に皆んな龜井戸の方へ逃げて行つたのさ。ところが其處もいけないんで、たうとうばら／＼になつちまつて、焚きで流れて來たのよ。

お鶴。まアさう！

お豊。其の時、姉さん久しぶりに來てね、こつちへ行かうと思ふが一緒に行つては、といふので、こゝへは來たといふわけさ。あゝいやだ／＼……身から出た錆とは云ひながらね！

おあさ。鶴ちゃん、お互にこゝの姉さんのやうに、今に成金になる男でもめつけて、うんと入れ上げてかうぢやないの。

お鶴。全くだわれ！

お豊。私わたしはどんなことがあつたつて、てかけめかけになるのはまつびらさ。なるほどなら、レツキとした女房さ。そして一旦女房になつた上は、それまでのことはいゝが、亭主には他の女とほんのチツとばかりの浮氣も、許さなかつもりだよ。

おあさ。それぢや、お豊さんの亭主になつた人大變ね。

お豊。自分の亭主が、斯ういふ料理屋へなど出入をしてゐるのを、平氣で居るやうな馬鹿女の、意久地のなさつたら、齒痒はがゆいほどだわ！

おあさ。お豊さんは氣位が高いんだから、それもさうでせうが、こちとらはさういふやうにはいかないわ。ね、鶴ちゃん？ てかけでもめかけでもあしかけでも、大事にしてくれる旦那さへありや、こんな處私、何時でもよろこんで出て行くわ。

お鶴。私もさうよ、どんなことだつて生命いのちにはかへられないと思ひますのよ。

お豊。けどね、斯ういふ處へ來る男には、ろくな奴はありやしないことよ。どうで皆んな浮氣男さ淫亂者さ。

おあさ。そんなこと思つてるので、それでお豊さん何時でも、自分のお客をいぢめるんだね。

お豊。さうさね。どうで人の操を金で買はうつて奴さ、憎い奴さ。

おあさ。さう云つてたら何時までたつても、いゝ男は出来アしないことよ、ね、鶴ちゃん！
お鶴。さうだわ。

お豊。若し私の心を買つてくれる男があればね！ 私の身體はほつといて、私の心だけ買つてくれる男があればね！ 私の身體は穢れてゐるが、私の心はまだ處女よ……

此の時お鶴ふと屈がんで苦しうな咳をする。

おあさ。まアへんな咳をするぢやないの、どこかわるいのぢやないの？

お鶴。私の咳はずつと前からなのよ、會社へ通つてゐた時分からなの。

お豊。お醫者に見てもらつてはどう？

お鶴。會社のお醫者さんに見て貰つたことがあるの、其の時お醫者さんが云ふには——此の咳はナカ／＼なほらないから早く會社をやめて、何處か海のある暖かい處へ行つてはどうかつて……
お豊。まアさう。

お鶴。それで會社はやめたんですの、でも海の方へなんかとても行けやしないから、ちつと内にゐたんです。けど何時までも遊んでゐるわけにもゆかないし、それに父ちゃんも病氣になつて寝ついたもんですから、茲へ来るやうになつたんです。

おあさ。可哀さうにね。

吹雪の音——少時。

お豊。なか／＼やみさうにないのね。

おあさ。なんだかだん／＼強くなつて来るやうだわ。

お豊。もう何時でせう？

お鶴。さつき下りた時、八時半過ぎてゐてよ。

お豊。ぢやもうかれこれ九時ね。こんな晩だから、もう誰れも來ないでせう。片付けて寝ようぢやないこと。

おあさ。姉さんまだ寝ないでせう。

お鶴。姉さん、おぢいさんと飲んでゐたわ。

おあさ。ぢや寝たつていゝわ。

お豊坐はつたまゝ片付ける、おあさお鶴それを左手へ運んで行く。此時突然、窓の外でメキノ、といふ木の折れるやうな音がする。

お鶴。あら！ なんでせう？

おあさ。吹雪で何か折れたんでせう。

二人は向ふの部屋へ行つて片付ける。お豊は火鉢によつてぢつと考へ込む。此時ガタ／＼と音がして窓の戸障子が跳飛ばされ、吹雪の一團りと共に、一人の怪しい男が飛び込んで来る——上半身は白いシャツ、下半身は青服ズボン。跣足、全體に雪と泥がまみれてゐるから誰だか少しも分からない。(手に七首を持つてゐる)三人とも「あれ！」と悲鳴をあげる。

怪しい男。だ、だ、まつてろ！ 聲をたてると、ぶつ、ぶつ、殺すぞ！ (と云つてあわてながら窓の戸を開める。おあさお鶴這ふやうにして此方の部屋へ逃げて来る)う、ごいぢやならねえ、ぢつとしてろ！ (と七首を三人の方へ向ける)

三人は中腰にふるへながら自然と一つ所にかたまる。

お豊。(ふとへんな聲で) まア岸さん！

岸。(ドキツとして) シーツ……(初めて自分に還り) 豊ちゃんか！ ム……それぢや茲は豊ちゃんの家

だつたのか！

おあさ。まア岸さんなの！

お鶴。まア——！

皆々呆れて——少時。

お豊。(ふと腹立ち聲で) 悪戯もたいいでいにするがいゝ、人をおどかしやがつて！

岸。(急に弱くなり) まア——豊ちゃん、静かにしてくれ。これにや譯があるんだ。

お豊。(相手の云ふ事てんで聞かないで) 私もう辛抱出来ない、我慢出来ない。姉さんにさう云つて、それ相當な處分をして貰ふからさう思ふがいゝ。

お豊ブンと立つて行きかけ、おあさお鶴それに續く。岸狂人のやうに飛んで障子の前へ行き、七首を口に唾へて立ちばだかる。三人思はず右手の隅へと逃げる。

お豊。殺したいなら殺してくれ、さア殺してくれ！(わざと前へ出る)

おあさ。まア〜お豊さん……。

お豊。おあささん止めないでくれ。(岸を覗みつけて)この助平野郎め、私をおどしに來やがつて、私をおどしに……

岸。(口から七首をはづして)さうぢやねえんだ。そいつア思ひ違えだ。

おあさ。兎に角落付いて下さい、落付いてゆつくり話せば、分かることでせう、ね、ね。

岸。さうだ、落付いて話せば分かるこつた。頼む、どうか頼む、でつかい聲だけはしないでくれ。

そいで、一通り話すまで皆んなぢつとして〜くん、頼むよ。(一歩進んで聲をひそめ)實は俺は今、人殺しをして來たんだ。

おあさ。まア!

岸。(キチンと坐つて)此の崖の上で會社のあの支配人めを、こ、これで以て、つゝ殺して來たんだ。

大勢の追手がかゝつて、仕方がねえからあの崖をおツ飛んで何處かの家根の上へ下り、其まゝ家根傳ひに恰度こゝまで來るとい、向うの道からも横手からも、驅けて來る提燈が見えたから、もう仕方がねえと、此家とは知らずに飛び込んで來たんだ……何にも俺、豊ちゃんを殺す爲めで

もお前さん等を威す爲めでも、ありやしねえんだ。頼む、どうか頼む。斯ういふ譯だで、長くお前さん等の邪魔しようと思つて云やしねえ、ちよつと休まして貰つたら、それで出てくつもりだ、永い間の馴染みがひに、俺が最後の願ひだ、ほんの呼吸を休ませる間だけ、どうか黙つてゐさせておくん、なさい!

お豊は此物語の半ば頃から非常な感激を以て聞き出し、前へ〜と居座りよつてゐたが、此時嬉しうに口を開かうとする。と、障子の中で『よくおやんなすつたれ、岸さん!』といふ聲をかけて、およねが出て來る。お豊ハツと口をつぐむ。岸思はず片足を立てキツトなる。

およね。(正面真中に出て)様子は今そこで聞きましたよ。まア安心してゆつくり休すんでいらつしやい。私がそれまでお引受けしますからね。

岸。(七首を投げ出し兩手をつかへ)おゝおかみさん、有難たえ!(兩眼から涙ハラ〜と落ちる)

およね。まア手をお上げなさい。(岸顔を上げおよねを見る)ほんとにすばらしいことをしなすつたのね!

お豊がっかり失望したやうな唇をかんで屈がむ。吹雪の音——幕

第三幕 吹雪の夜半

110B

前幕から三四十分後の事。間の唐紙はたてきつてあり何處もきれいに片付けてある。

お豊一人考に沈んで火鉢によつてゐる。少時——まだ吹雪の音がしてゐる。ふとお豊、利耳を立て目をそばだてて待ちかまへてゐる。唐紙をあけておあさが出て来る。お豊がつかりする。おあさは一寸とした料理と銚子を持つてゐる。

おあさ。(持物をちやぶ臺に載せながら) 今ね、会社の守衛さんが外まで来たのよ。戸の向うから聲をかけて「お家には何か異状はないでせうか？」つて。「なにもありません」と云ふと、「今會社へ泥棒が入つて此邊へ逃げて来たから、御用心して下さい」ていの。すると姉さんが「さういふ噂を聞きましたから、今外の方まですつかり調べて見ましたけど、別に異状はございませんでした」と云つたら、「お休みなさい」と其まゝ行つちまつたのよ。

お豊。其時あの人は、何處にゐたの？

おあさ。岸さん臺所で顔を洗つてゐたの。

お豊。おぢいさんはどうしてるの？

おあさ。おぢいさんはいゝ鹽梅に、前から寝てゐるから何にも知りやしないことよ。

お豊。さう。

おあさ出て行く。少時、お豊また目を大きくして待ち受ける。と、およね先きに立ち、どてらを着た岸を連れて来る。お豊ひどく失望する。

およね。岸さん、茲へお坐わんなさいね。

岸。どうも濟みません、濟みません。(恐縮しながら正面に坐わる)

およね。さア一つ。

岸。有難たえ。有難たえ。(一口飲んで) 家根の上を狂人のやうに駆けつてた時は、こんなりまえ酒二度と飲めようとは思はれなかつた……

およね。尤もですわ。けどもう安心していらつしやい。

岸。有難う、有難う。だが、里見君や山田や内野は、どうしたとらうな？ 皆んな遣られやしなかつたらうかな……

吹雪の町

110A

およね。あの人も其時、あなたに加勢したんですか？ 加勢したのなら、屹度捕まへられたでせう。

岸。さう……咄嗟の間でどうもよく分からねえ。

およね。其時のこと、詳しく話して下さいね。豊ちゃん聞かうぢやないの。

お豊。……………

岸。兎に角、談判ぢや俺達の方がすつかり負けちやつたんだ。そこで俺が前へ出て何か云はうとする。と里見君が「まあ待て！」と俺を止めたやうに思ふ。それを俺ふりきつて、支配人の腕を捕まへたんだ。だが奴は、柔術の達人だらう、直ぐ俺の手をねぢ上げて、つゝばなしやがつたんだ。俺はいやといふ程壁に頭をぶつけた、さうだ、其の時頭がガンとしたのを今でも覚えてゐる。俺は、これは理窟でも腕でもかなはねえ——泣き出したいやうな全くいやなく気がしてね「どうも済みません、済みません」とべそをかきながら、顔をふくつもりで、いや、恥かしいんで顔を隠くすつもりで、手拭を探しに懐の中へ手を入れたんだ。すると手にさはつたのが、匕首さ。「あこれさへありや」と俺は初めて殺す氣になつたんだ。尋常ぢやかなはねえと、俺は早速「済みま

せん」「済みません」と云ひながら、奴の側へよつて行つたんだ。其時奴なにか云つた、さうだ、「斯うなつた以上は一切私に任かして下さいね。いゝでせう」といふ、いやに落付いた太い聲だ。ウヌと俺は、懐の中で匕首を抜くと直ぐ、斯ういふ具合に左手を出して奴の胸を抱へ込んだ、抱へ込んだ拍子に右手の匕首を其横ッ腹へぶすりと突きさしてやつたんだ。其時奴の手が俺の首にかゝつたのを覚えてゐる。俺は一生懸命、左手を引きつけ右手を押して、抱へたまゝ一緒につゝ倒れたんだ。倒れる拍子に呼吸が俺の顔へかゝつたのを覚えてゐる。と、俺の抱へた者が、なんだか斯う張合ひ抜けがして柔かになつたやうに思ふと、俺の肩に手をかける奴がある。もう大丈夫や、つゝけたと思つたから、俺思ひきつてうんと飛び上がった。その時二人の男が俺の側から飛びのいた。それは確かに庶務課長と職工長のやうに思ふ。なんでも其際だ、俺は直ぐ側の窓から飛び出したんだ。ム……

およね。まあね！

岸。其時里見君等、どうしてゐたか、ちつとも覚えねえ……

およね。さうでしたか、ほんとにね！ 兎に角明日の朝になれば分かりませう。

岸。さうだ。俺はこれから何うならうとも、里見君にだけは一度會ひたいんだがね！ おかみさん
 こんなに助けて匿まつて貰つて、その上面倒云つて濟みませんが、里見君にだけは一寸でも會へ
 るやうに、どうかしておくんなさらねえかね！ え？

およね。え、ようござんす、屹度會はしてあげませう。

岸。有難たえ、有難たえ。

およね。安心していらつしやいね。

岸。俺はね、おかみさん、親も兄弟もねえ身體だから、此まゝ首をチョンぎられようが、後の心配
 はなんにもねえんだ。たゞ惚れた女と里見君にさへ會へれば、それで満足なんだ。惚れた女は今
 茲にゐてくれる。俺を馬鹿にしきつてゐるが、それでもかまはねえ、顔だけは見ることが出来た。
 俺をひどく憎んでゐるが、それでもかまはねえ、俺は満足する。

此時おあさ何かの料理と銚子のお代りを持つて来る。

およね。下は何も變つた事はなくつて？

おあさ。え、なんにも。

およね。ほんとはよく氣をつけておくれね。

おあさ。はい、それで姉さんお銚子は？

およね。もう一本つけといて下さい。そしてそれが出来たら、持つて来てね。

おあさ。はい。(出て行く)

およね。豊ちゃん、お前さんまア何うしたの？ さつきから黙つてばかりゐてさ。

お豊。(なんとなく不自然に) 姉さん……姉さんがいくら此人を助けようたつて、ちやほやせうたつ
 て、此人がどんなえらい事をしたつて、私いやな人はいやなんですからね。

およね。まアお前さん、何を云ふの。何にもそんなことを話してやしないぢやないの。

岸。おかみさん、もう何も云つておくんなさるな。(お豊に) それやね豊ちゃん、お前が俺をきらつ
 てるのは今日に始まつたことぢやねえんだ。だが、俺は今も兇狀持なんだ、人殺しなんだ。

明日にもひつ捕へられなきアならねえ此の身體だ！ どうかお別れだと思つて、一言でもいゝが
 ら、深切に云つてくん、當り前に交際つておくんささえ、ね、ね。

お豊。(わざと毒々しく) いやなこつた。私の身體は賣物だから、人殺しだらうが誰だらうが、金さへ

くれ、や何時でも任かしてあげますよ。けど、深切だとか懣だとかいふものは、さうく切賣り出来ませんからね。

およね。豊ちゃん、その言ひ振りはなんですね。假りにも今まで永い間のお客様ぢやないかね。お前さんには、情なさけといふものはないんですか。

お豊。ぢや姉さんは、情を切賣り出来ると思ふのですか？ 心にもないお世辭を云つたり嬉しがら、せを云つたりするのが、ほんとの深切だと思ふのですか、情深いことだと思ふのですか？

およね。もういゝことよ。何時か濱町で言ひあつたことを、また茲でくり返すのですかね！

お豊。お望みならね。

およね。もうお互によさうぢやないの。

お豊。ぢやなんだつて姉さんは、私の客をそんなにまで、世話をやきたがるんですかね？

およね。お前さんのお客でせうが、誰のお客であらうが、難儀をしてゐる人を助けたいのは、私の性分ですからね。私の助けたいと思つた人が、お前のお客であつたからつて、私遠慮しなくてはならないものか知ら？

お豊。だから姉さんの御勝手になさい、と云つてるんですよ。(立つて) まあうんと可愛がつてあげるがいゝさ！(出て行く)

およね。あれだからね！

岸。濟みません、濟みません。

およね。ほんとに變り者ですからね！ それにだいぶヒステリーも重くなつてゐるやうですからね。どうか勘忍してやつて下さいね。

岸。なアになアに、きははれるのは俺の身の不運さ、どうすることも出来やしねえ。(しめつけくなる)

おあさ銚子を持って来る

おあさ。あの、鶴ちゃんなんだかゾク／＼寒氣がすると云つてましたから、お先へやすませましたよ。

およね。さう。お前さんも戸閉りをもう一遍見廻つて、寝ておくれよ。

おあさ。ぢやお先きへ。(出て行く)

およね。雪は少くなつたやうですが、風は段々強くなつたやうですね。けど今夜は、あらいがあつ

て却つて岸さんには、よかつたんですね。

岸。まだ宵の内だつたから、普通の日にあんな風に屋根の上を駈けるとしたら、直ぐ知れちまうところだつた。これを天の助とでも云ふのかな……おかみさん、あなたが助けて下さつたのも、天のお助だ。俺は死んでも、此御恩は忘れはしねえ。

およね。私は岸さんの、その男らしいのに感心したんですよ。それから豊ちゃんのことでも、お氣の毒でならないんですよ。さアもうさういふ話はやめて、もつとお飲みなさいね。(盃をさす)

岸。(その手を取つて捧げるやうにし) 勿體ねえ、勿體ねえ。有難てえ、有難てえ!

第四幕 翌日の晝

前幕から翌日にあたる晝の事。

間の唐紙はしめきつてある。左手の障子から明るい光線が投込まれてゐる。

幕が開いて一寸すると、障子をあけてお豊が密かに出て来て、暫らく立つて唐紙の向うをうかがひ飯

臺によつて中腰になる。唐紙の向うからおよねの聲がする。

およねの聲。だアレ? そこへ来たのは……

お豊。……

およねの聲。あさちやん? 鶴ちやん?

唐紙の右手の端をあげておよね出て来る。お豊靜かに頭を屈がめる。およね一寸それを見て後、足早やに其後ろを通つて、障子の方へと行きかける。お豊ふと頭を擡げる。

お豊。(小さいが底力を以て) 姉さん!

およね。なによ。(立止まる)

お豊。(悪意を以て) 姉さんそれでも、なんともないこと?

およね。なにがさ?(氣づいて) まアなにを云つてるのさ。(行きかける)

お豊。ちよつと待つて——さう逃げなくたつていゝぢやないの。

およね。(わざと靜かに) どうしたと云ふのです?(歸つて来て向きあふ。但し自分は立つたまふ)

お豊。(冷酷に) よくさういふことが出来るものね——よく私をふみつけてくれたことね!

両手で顔をおぼうて風がむ——幕

二二六

第五幕 同じ宵

前幕と同じ日なる夕暮れ前の事。

此方の部屋の飯臺には、岸が頭をおさへて坐つてゐると、向ふの部屋の火鉢には、お豊がちつと岸を睨らんで中腰になつてゐる——暫時。左手からバタ／＼おあさとお鶴が出て来る。

おあさ。(岸の側へよつて小聲に)岸さん、町中はあるたの噂で、大變よ!

岸。どんな噂してゐるね?

おあさ。どこでもかきこでも、それは大變だつたらうね! ね、鶴ちゃん?

お鶴。さうよ!

おあさ。ほんとに岸さんはえらい人だつて——千七百人の男や女の職工の、大恩人だつて!

岸。馬鹿云ふねえ。

おあさ。まア馬鹿だつて!

岸。嘘もいゝかげんにしてくんな。俺今そんな香気なこと、云つちやゐられねえんだ。

おあさ。まアほんとにしないなんて! ね、鶴ちゃん?

お鶴。嘘ぢやないことよ、實際ほんとですよ! 私酒屋さんでも、それから荒物屋さんでも、聞いて

たんですよ!

おあさ。私薬屋で聞いて、それから今また鶴ちゃんと一緒に、お湯でも聞いたのよ、ね、鶴ちゃん?

ん?

お鶴。さうさ!

おあさ。十軒長屋のおかみさんがさう云つてゐてよした——うちの人がね「口で以て理窟を云ふ男はいくらもあるが、それを手で行はふてい男はなかくない、岸君はよくやつてくれた! よくやつてくれた!」と、朝から晩まで涙を流しては云つてゐる——とね。

お鶴。私に酒屋さんで、會社へ行つたて時分のお友達の信子さんに會つてね。——女工達は皆んな、岸さんの身代りになれるものなら、喜んでなつて監獄へでも行きたい、と云つてゐるさうですつて!

岸。あゝ！ 皆んなはそんなにまで、此俺を思つてゐてくれるのかた！ 有難てえな！（涙をふく）
 おあさ。（熱狂的に）皆んなは、そのえらい人が何處にゐるかも知らないで、あんなに騒いでる——
 そのえらい人のゐる處を私はちやんと知つてる！ 私共その人を匿まつてゐる！ その人の世話
 をしてあげてゐる——と思ふとね、私ほんとに肩身が廣いやうな氣がするよ！ ね、鶴ちゃん！
 お鶴。私もさうよ！

おあさ。さア、それだけ云つたらちよつと安心。まだお喋べりしたいこととつさりあるが、今お化粧をして来るから、其の後に聞いて下さいな。さア早く白粉をきれいにぬつて、えらい人岸さんに惚れて貰はうよ！

お鶴。まアおあささん！

おあさお鶴下カ〜と出て行く。岸お豊の方を見る。お豊猶ぢつと此方を見詰めるので、岸また頭を
 っただれる。お豊立つて此方へと来る。

お豊。岸さん！ 私の心まだ分からない！

岸。その心は分かつた、よく分かつた。だが、なぜこんなに急に變つたのか、それが俺にや不思議

だ、それが解せねえんだ。いつたいなぜお前は、今まであんなにひどかつたんだね？

お豊。それ實は、私にもよく分からないの。けど、私は我儘者よ、實際ひどい我儘者よ。だから私わざとお前さんをふみつけにしたんさ。お前さんが私より外の何處へも行かないといふことが、分ければ分かる程、ふみつけにして見たかつたんさ。お前さんが私を思うてくれればくれるほど私はお前さんをいぢめて見たくつて仕方がなかつたのよ。

岸。ム……だが俺は、お前さんがこんな處へ来る男を、皆んなきらつてゐるからだ、思つてゐたんだが……

お豊。それやそれもあるさ。

岸。俺はお前のそのいきに惚れたんだ！ だが、そいつをなぜ今になつて、かうなつたんさ？

お豊。それが不思議なんだよ……それは昨夕ね、お前さんがあんな風をしてやつて来て『支配人の奴をブツ殺したのだ！』と云つた時、あの時、私はハツとして、私の我まゝから脱れたんだよ。私の長い間の偏屈から脱れたんだよ。——此の人は並の男とは違つた人だ！ 心も身もほんとに眞直な人だ！ 錢金では買はれない眞實を有つた人だ！ 情や戀の爲めには命を投げ打つ人だ！

といふことが分つたのさ。

岸。ム……それで？

お豊。それで、私の眞實を見せるのは此時だと思つて——命をすて、でも助けてあげようと心にきめて、それを云はうとしようとする時、恰度その時、姉さんが聲をかけて出て来たのさ。あゝ！あの時が私の運のきまる時だつた！けど、其運も今まきなほしてゐるから！永い／＼間の凶運を今吉運にまきなほして見せるから！——生涯の嘘の暮しをこれから取返して見せるから！いよさ、いよさ。（ちよつと間）それから私、お前さんと二人だけさし向ひにならう、なつた時其の譯をよく／＼云はう云はうと思つてゐたんだが、まゐわるく、其時は來ないで、たうとう姉さんが間へ入つてしまつたのさ。私もうさうなると、また元の恐ろしい意地が出て來て、その私の我がまゝと姉さんとの張合ひで、こんな風なことになつちまつたのよ——心にもないことを云つてからさ、心に思へば思ふほど、そのうらはらのことを云つてしまつたのさ。

岸。ム……

お豊。私ほんとに私の心持をうまく話すことは出來ないが、どうかこれくらゐで、その事は許して

下さいね。そしてどうか私の眞實を信じて下さいね、ね。

岸。お前の眞實は信するよ。それは有難たえと思ふよ。

お豊。けど、姉さんとの義理があると、云ふのかい？

岸。さうだ！

お豊。お前さんは姉さんを、随分と信用して有難たがつてゐなさるが、姉さん眞實お前さんを思つてゐるんぢやないことよ。

岸。なんだつて？

お豊。姉さんのこと、私にはよく分かつてゐるのさ。姉さんといふ人はね、決して人に惚れられるといふことのない人よ、また自分から惚れるといふことも、ない人よ。今までだつて、何時でも私が思はれてばかりゐるので、姉さんそれをひどく苦にやんで、隙があつたら私からその男を寢取らう寢取らうとしてゐるんさ。それで私、取れるものなら取つて見るがいと、わざつと其男をふみにじつてやるのよ。

岸。俺にや分らんねえ……

お豊。ほんとよ。何時でもさうなのよ。なん度もあつたことよ。
岸。どうだか？

お豊。今度だつてうまくお前さんが取れたから、なるべく側を離れまいとしてゐるぢやないかね。
今は、昨夜中お前さんといちやついたその罰で疲れが出て、やつと下で寝てるんだだけどね——
岸。お前そいつア……

お豊。なアにさうさ。まア／＼お前さん、お前さんの油をすひとつて了ふまで、とても脱すことぢやないから、覺悟をしてゐるがいゝさ。

岸。そんなことがあるもんかね。俺は里見君に會へさへすれや、直ぐ自首して出るなり、事によりや東京方面へつゝばいらうと思つてゐるんだからね。茲に永くゐる譯はねえよ。

お豊。それ、それが嘘さ。姉さんお前さんには直ぐ里見さんと呼んで來てあげると云つてるが、なんのそんな事ちつとも運んでやしないことよ。

岸。さアね？

お豊。里見さんと呼んで來たら、お前さん直ぐ何處かへ行つちまふでせう。それぢや、折角取つた

お前さんが、惜しいからね。

岸。ム……

お豊。ね、岸さん！ 私と姉さんとは、いつたい、どつちが眞實でせう、まことでせう？ 見て、御覽！ 今に分かるから！ 分からせないでおくものかね！

岸。さうかね……さうかね……(考込む)

お豊。お前さんほんとに私の眞實を疑はないんなら、(側へよつて岸 手を取り ね、ね、その證據を見せて！ ね、その印しを見せてね！(立つて男を引起こす)

岸。いや、そいつアいけねえ、そいつアいけねえ。

お豊。まだ姉さんの義理を思つてるの？

岸。俺の恩人だからね、命の親だからね。それだけは許してくんな、今だけでも、どうか許してくんな。

お豊。(手を一寸とひいて) 成程、それぢやなんだね、姉さんお前さんに誓ひでもさせたんだね？ あゝ屹度さうだ！

岸。(急いで) いやさうぢやねえ、さうぢやねえ!

お豊。さうでなくば、なんともないぢやないの。たとひ誓はせたつて、先方が嘘云つてるんだからいゝぢやないの! ね、いゝぢやないの!

お豊無理に岸を奥へ引つばらうとする。岸それを迷惑さうに防ぐ。と、其拍子に懐から七首が轉げ落ちる。お豊手早く拾ふ。

岸。それはお前!

お豊。私これ預つてくことよ。(懐中に入れる) ね、ね、岸さん! お頼みよ、ね、ね、姉さんのこ

と忘れてさ、私のことだけ思つてね、思つてね!(狂的に坐つて拜みながら) 拜みますわ、拜みます

わ! 私の命をあげますよ、何時でも命をあげますわ!

岸。そ、そんなことしねえでさ。さア匕首を返してくんな。

お豊。(益々狂的に伏拜んで) 命を助けると思つて! 命を助けると思つて!

岸。そ、それア俺が、お前に云ふこつた!

お豊。(ふと中腰になつて) ぢや、どうあつても?

岸。それだけは許してくんな、今だけは許してくんな。俺の方から頼む! 頼む!

お豊。(ツト立って) お前はほんと姉さんに、惚れたんだね!

岸。まアさ、まアさ……

お豊。よーし! 私も私さ! 敗けてなるもんか! 死んだつて敗けやしない!

岸。なん、なんだつて?

お豊ツカ〜と出て行く。岸其の後を見送つて小首を傾ける——幕

第六幕 その夜

幕が開くと、非常な騒ぎでもあつたやうに、唐紙も障子もぶつ倒れてゐる。左手の小さい部屋もさうけ出され、梯子段の上り口も見える。ちやぶ臺や酒肴の道具類もあちこちと轉がつてゐる。

向ふの部屋でおあさ、かゝみついてゐるお鶴を介抱して居る。

お鶴。(青い顔を上げて) もういゝことよ、いゝことよ、どうも濟みません、有難う、有難う。

おあさ。ぢや鶴ちゃんは、下で休んでるがいゝさ。なんぼなんだつて、病ひは辛いからね。こゝは

私がぼつ／＼掃除するからさ。

お鶴。ぢやちよつと休ませて貰ひます。

お鶴苦しさうに梯子段を下りて行く。おあさ掃除を始める。少時、お豊よつて来る。

おあさ。まアお豊さん。お前さん何處へ行つてたの？ 今の騒ぎ知つてよ？

お豊。いゝえ、どうしたといふの？

おあさ。岸さんが、捕まへられたのよ！ どこから洩れたものか、急に大勢の捕手がやつて来てね、

たうとう縛つて行つちやつたよ！

お豊。さう。

おあさ。私下にゐたんでよく分からなかつたが、それや／＼腹が立つて、ヂリ／＼としたわ！ ど

うかして助けてあげたいと思つたが、どうする事も、なにする間もありやしない！

お豊。さう。

おあさ。それにね、あの鶴ちゃんがびつくりしたのか、今掃除をしてると急に病が起つてね、後片付け私一人で、困つてゐるところよ。

お豊。姉さんはどうして？

おあさ。それが不思議なのよ、捕手が来るまで確かに茲にゐた筈なのに、何時の間にかゐなくなつてしまつたのよ。

お豊。さう……？

おあさ。おぢいさんは尋ねる事があるといふんで、一所に連れて行かれたしね。

お豊。さう。

おあさ。さア手傳つて下さいね、こんなぢや仕方がないぢやないの。

お豊。ほつといいたらいゝさ。

おあさ。まア！ お前さんも何うかしてるよ。何を云つたつて『さう』『さう』だつて——。私一人で片付けるさ。

おあさ頼りに片付る。お豊ぢつと立つたまゝ考込む、少時。梯子段からドカ／＼およれと里見が飛び出す。およれは手拭で頬冠りをして尻をはいしより、里見は青服に外套の頭巾をかぶつてゐる。

おあさ。まア姉さん！

およね。(邊りの様子を見て)遅かつた!

里見。残念だ!

およね。(頼冠りを取り)岸さんやられて?

おあさ。あんなに大勢来たんですもの! それや氣の毒だつたわ! 綱でひどく縛られてね! 顔や手から血が流れてゐたわよ!

里見。それで君! 出てからのくらゐになるね?

おあさ。二十分もたつたか知ら? ……恰度今時分役所へ着いてる頃よ。

里見。さうか。

おあさ。姉さん、あのおちいさんも連れて行かれてよ。

およね。さう。

里見。もつと早く茲にゐたことが分つてゐたらね! あゝ残念なことをした!

お豊。(つと前へ出て)岸さんはお前さんに早く知らしてくれつて云つたんですよ。それを此の姉さんがわざつと知らせなかつたのです。

およね。とんでもないことを! 馬鹿をお云ひでない!

兩女睨み合ふ。此の時大勢の聲がして、七八人の職工が飛び上つて来る。

職工。おゝ里見君!

里見。遅かつたよ!

職工。さうだつてね! 今そこでちよつと様子は聞いた。

職工。もう相談の餘地はねえ! さア直ぐ出かけよう!

職工。行かう! 行かう!

職工。皆んなは集つた! やるまでだ!

職工。やらう! いや〜やらう!

此の時四方から、ゆらぐやうな間の聲が起る——『ウハーツ!』『ウハーツ!』……

職工。あれがそれだ。

里見。よし!

職工。とりかへしだ! とりかへしだ!

里見先きに立ち職工皆々下りて行く。「萬歳萬歳」といふ聲、「ウハーツウハーツ！」といふ聲で、
全場を壓する。

三〇

おあさ。まア大變なこと！ まるで戦争だ！ これからどうなることだらう！ (道具を持って下りて行く)

関の聲次第々に遠ざかる。

およね。(歎聲) あゝ！ あれで屹度助かる！

お豊。(皮肉に) だが、もう茲へは歸つて來やしないことよ。

およね。(冷かに) さう……それでいゝさ。その方がいゝのさ。

お豊。ぢや姉さんお前、あの人のことなんとも思つてゐなかつたの？

およね。たとひ思つてゐたとしても、仕方がなからうぢやないかね——兇狀持をさ。ふん、兇狀持だからちよつと思つてやつたまでさ。

お豊。(全身ををのゝかして) し、しまつた！ (袖を噛み破る)

およね。おや？ し、しまつたつて？ (考へて) ぢやお前さんだね、會社へ知らしてやつたのは！ 成程

ね——それで分つた。やれ／＼、どうも御苦勞様。あつたら色男を、此町の恩人を、千七百人の勞働者の大恩人を、よくまア賣つてくれたのね！ さぞ嬉しいでせう、さぞ皆ながお禮を云ふことでせうよ。

お豊。あゝ——(倒れるやうに坐わる)

およね。(柱にもたれてゆつくり中腰となり) これで豊ちゃんも立派な謀叛人さ、此町の謀叛人さ。

お豊。悪黨！ 悪者！ 姉さんお前こそ、ほんとの悪黨だ！ 悪者だ！

およね。(冷靜に) 此町の恩人を匿まつた私が悪黨かね、悪者かね。そして其の恩人をはねつけたお前さんが、其の恩人を賣つたお前さんが、善人かね。

お豊。(相手の言葉を耳に入れず) お前さんは、何にもかもよく飲み込んでゐて、よくも斯うしたことが出来たものですね！ よくも私をおとし入れたものですね！ お前さんの深い／＼たくらみ、あゝ恐ろしい、恐ろしい！

およね。私がお前さんに云ひたいことを、皆んなお前さんが云つてゐる、これは可笑しい。
お豊。お前はほんとに鬼だ、蛇だ！

およね。おやく。

二三二

お豊。お前さんはね、濱町で私がいぢめてゐたあの旦那に恩をかけて、それでたうとう金をせしめたのさ。そして今度だつて、あの人のセツパ詰まつた處へつけこんで恩を賣つて、私といふものからひきはなし、此町の皆んなに鼻を高くしたのさ。そして仕舞には、その人を私に訴へさすやうにちやんと仕組んでおいて、後で平氣な顔で笑つてる。悪魔だ、悪魔だ！

およね。いくらそんなことわめいたつて、誰が信するものかね。

お豊。たとひ誰が信じなくとも、それがほんた、それが眞まことのことだ！

およね。お前さんが何うしてもさう思ふといふのなら、それでもいゝさ。けどね、いくらどう云つたつて、もうなんともならないことぢやないの。つまりはそんな事皆んな過ぎ去つたこと、消えたことよ。ですから、お互にあの人のことから、さつぱりと手をひかうぢやないの。そしてお互に何んにもなかつた昔のやうに、落つかうぢやないの。ね、手をひかなくツちや嘘よ。つまりお前さんがもうそんな事云はないといふなら、私だつてあの人を賣つたのは誰だなんていふ事も決して口に出すことぢやない。ね、さうしませうよ。その方がお互にいゝぢやないの、ね。

お豊。まア冷たい悪魔！

およね。若しそれを何處までもお前さんが云ひ張るとお云ひなら、それはお前さんの身の爲になりませんよ。あんなに氣の立つてゐる職工達が、お前さんを放つて置くと思ひますか。お前さんがあの人をいぢめてゐたといふ事を知つてゐる人は、一人や二人ではないからね。そして私があの人に同情してゐた事は、皆んな知つてゐるからね。

お豊。……………

およね。お前さんが今云つたやうな、そんな深い道理は、こゝいらの人には、大勢の人には、納得出来るものぢやありませんよ。けど、お前さんがあの人をいぢめた事、あの人を賣つた事は、子供にだつて直ぐ分かることだからね。

お豊。……………

およね。私は何もお前さんを、罪におとしいれようと云ふのぢやありません。私とお前さんは、やつぱり姉妹ですよ。さアお互に、何にもなかつた昔に、返らうぢやあないの、ね、ね。

お豊。……………

此の時おあさ急いで上つて来る。

おあさ。姉さんまた大變よ！ 鶴ちゃん血を吐いちゃつてさ！

およね。おやそれはいけないね。

およね中腰から立たうとする。その瞬間！ お豊躍りかゝつて其の脇腹へ七首をさす。

おあさ。(びつくりして) まアお豊さん！

お豊。(およねを柱に押しつけたまゝ叫ぶ) この女が岸さんを賣つたんだ！ この女が町の恩人を訴へたんだ！(その拍子に遠くの方で関聲が響く——手をはなすとおよねの死體バタリと倒れる) さアあさちゃん、早く皆んなの處へ行つて、此事を云つておくれ——町の恩人を賣つた仇討は、この私がしたのだとね！

おあさ呆れて坐る。『萬歳！』『萬歳！』『ウハ！ウハ！ウハ！』の関聲、次第々々に近づく

——幕 (大團圓)



大正十二年七月十一日印刷
大正十二年七月十日發行

(定價壹圓)

◀ 最新の奇蹟 ▶

著 作 者 藤 井 眞 澄
發 行 者 東 京 市 牛 込 區 矢 本 町 三 番 地 佐 藤 義 亮
發 行 所 東 京 市 牛 込 區 矢 本 町 三 番 地 新 潮 社

電話牛込
八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番

番二四七一(京東)替振

印刷所 東 京 市 小 石 川 區 西 江 戶 川 町 電 話 小 石 川 五 九 二 番
富 士 印 刷 株 式 會 社
印 刷 者 佐 々 木 俊 一

■ 泰西戲曲選集 ■

(1)	ピシエクス ロミオと エヅトリ	久米正雄氏譯
(2)	リメエテ ク 青い鳥	楠山正雄氏譯
(3)	イブセン 人形の家	中村吉藏氏譯
(4)	ピシエクス ハムレット	久米正雄氏譯
(5)	ロスタン シラノ・ド・ベルジュ	楠山正雄氏譯
(6)	ドストリ ソクラテス	福田久道氏譯
(7)	ヴンエ 地霊	楠山正雄氏譯
(8)	ピシエクス オセロ	久米正雄氏譯

□□□以下續々刊行 □□□

錢六册一料送 ◆ 錢拾九價 ◆ 頁百二製待册各

■ 現代脚本叢書 ■

(1)	未能力者の仲間	(附)AとB。或日の出來事其他	武者小路實篤氏著
(2)	飢渴	(附)大雪の夜	長田秀雄氏著
(3)	法成寺物語	(附)春の海邊。十五夜物語	谷崎潤一郎氏著
(4)	鬮舞	(附)葡萄棚。犬。小しんと馬	吉井勇氏著
(5)	阪崎出羽守	(附)嬰兒殺し。淀見藏。穴	山本有三氏著
(6)	雨空	(附)雪。五月盡。暮れがた	久保田万太郎氏著
(7)	秦の始皇	(附)芭蕉。遊女。義隆最後	灰野庄平氏著
(8)	七年の後	(附)夜の一。清盛と常盤	近藤經一氏著
(9)	第一の世界	(附)新緑。俊寛。ベテスダの池	小山内薫氏著
(10)	茅の屋根	(附)玄宗の心持。時勢は移る	菊池寛氏著
(11)	次郎吉懺悔	(附)或る時代。谷底。其他	鈴木泉三郎氏著
(12)	牡丹燈籠	(附)梁山。大膳。千姫の最後	長田秀雄氏著

錢六册一料送 ◆ 價壹册一價 ◆ 頁十四百二約册各

近代文藝十二講

生田長江、野上白川、森田草平、昇曙夢、貳圓參拾錢・送料拾貳錢

近代文藝の推移と發展とを説き、藝術上のあらゆるイズムと傾向とを明かにし、西洋各國の近代文學史を詳説して、其れ等の現下文壇に及ぶ。近代文藝の全景一眸の下に看取し得可し。文藝に關する説述論議の書中、斯くの如く大規模の下に編まれ、斯くの如く一切を説き盡くせるもの無し。周到平易なる近代文藝の百科全書也。

近代思想十六講

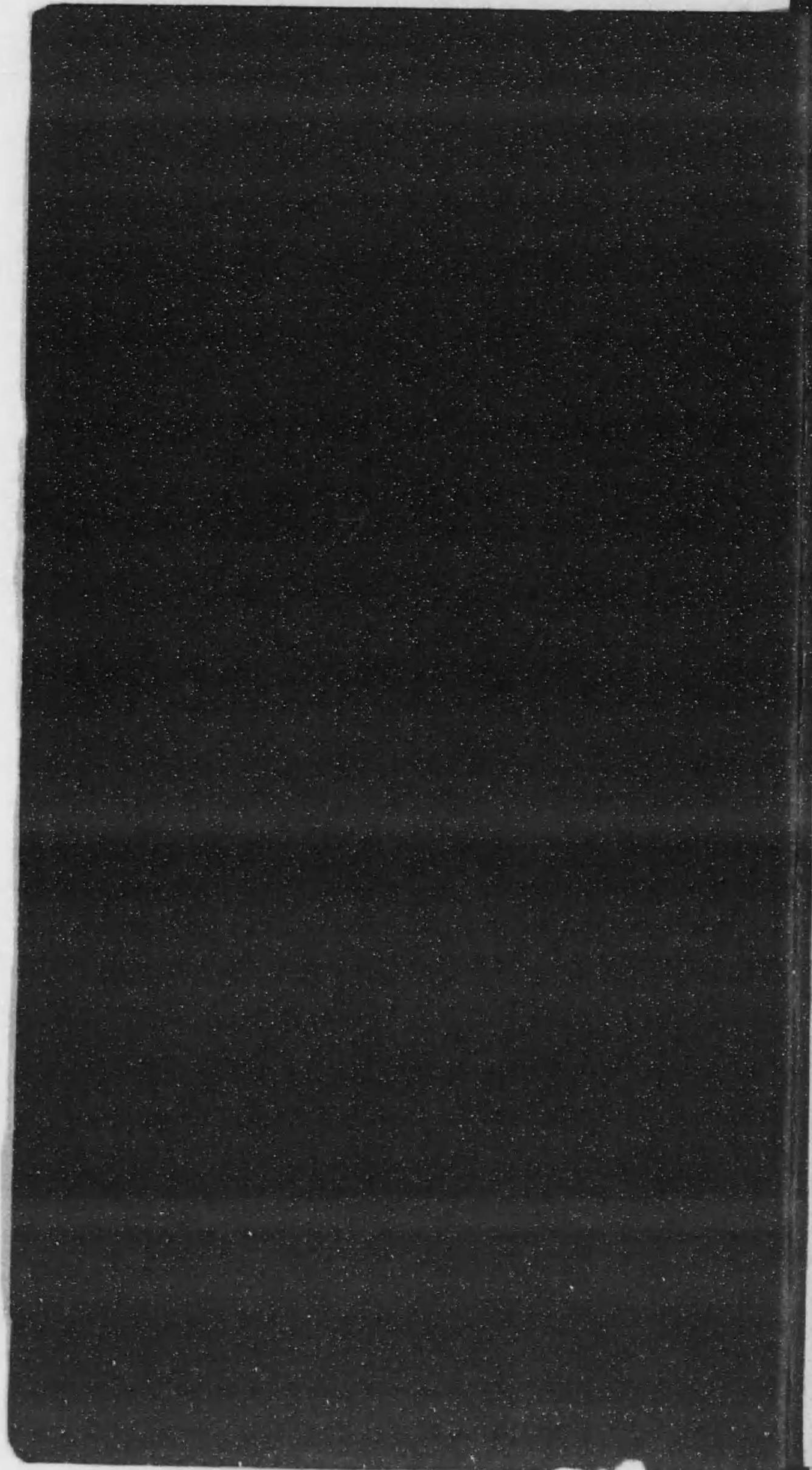
中澤臨川、生田長江、貳圓五拾錢・送料拾貳錢

頁書の眞實は眞に不朽也。本書世に出で、既に五年需用曾つて止む事なく、一切の類書を壓倒して茲に訂正三十二版を公にするに至る。蓋し本書の如く極度の平明と極度の懇切とを以て近代思想の一切に互り、説いて剩すところなきもの他に求むること能はざれば也。狂瀾澎湃する現代の思想界に處せんとせば、須く本書を讀め。

社會問題十二講

生田長江、本間久雄、價貳圓・送料拾貳錢

世を擧げて社會問題の攻究に熱中するの時、本書即ちこれが一切を網羅し、其問題の眞相と其運動の眞精神とを明かにし、産業革命と労働者階級の發生より資本主義的經濟組織の解剖に及び、婦人の社會主義を説明し、労働組合主義と同盟罷工等現下の新鮮なる題目に觸れ、婦人の性的道德、職業問題等に渉る。



500
23

23 23

終